様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６１１５

研究課題名（和文）19世紀フランス詩の神話的形象にみる宗教的混淆－高踏派からランボーへ

研究課題名（英文）Religious Mixture of Mythical Figures in nineteenth-century French Poetry: from Parnassians to Rimbaud

研究代表者
塚島　真実（TSUKASHIMA, Mami）

東京大学・大学院総合文化研究科・教務補佐員

研究者番号：８０７６１４０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、フランスの19世紀、特に1850年代から1870年代の、高踏派からランボーにいたる作品におけるヘレニズムとキリスト教の混淆を明らかにすることを目的とした。研究期間内の成果として、高踏派の作品の中には理想的な形式美ばかりでなく平凡な日常生活を背景とする叙情性も見られること、また、ランボーの特徴として、そうした神秘性と卑俗性の混淆のうちに、宗教的なもの・神秘的なものに対する批判的視線が強烈に存在していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the mixture of Hellenism and Christianity in nineteenth-century French Poetry, especially from the 1850s to the 1870s, in other words, from the Parnassians to Rimbaud. As a result of the study period, I show that lyricism based on mediocre daily life can be seen in the works of Parnassians, as well as ideal and formal beauty. Such amalgam of mystique and vulgarity also exists in Rimbaud's poems, characterized by a strongly critical view of religious or mythical things.

研究分野：文学

キーワード：仏文学　ランボー　高踏派　神話　19世紀

１．研究開始当初の背景

高踏派の作品においては、ヘレニズムの題材があまりに明示的に存在するがゆえに、高踏派のもつ宗教的多様性と複雑性についてはこれまでほとんど問題化すらされてこなかった。また、ランボーと高踏派の関連については、ランボーの個々の詩編における高踏派の作品のパロディや語句の部分的借用、韻律の観点から比較考察といった成果はあるものの、詩想に関して一貫性のあるテーマを立てて扱った体系的な研究はない。

本研究の研究代表者は、2014 年にパリ=ソルボンヌ大学に提出した博士論文において、ランボーの作品における身体の表象を通して、詩人のキリスト教的モラルに対する精神的闘いを明確化した。その作業の一環として、初期のランボーが模倣したとされる高踏派の作品を分析していく過程で、それらの作品に現れる異教神話の形象に、聖書の人物像を喚起するキリスト教的要素が取り込まれているという見通しを得た。そこから、ランボーの後期の作品にみられる異教神話の形象とイエス像を混合した超人的形象が、高踏派の神話的形象の造形に胚胎されているという仮説を立てた。さらに、ヘレニズムを賛美する高踏派詩人のうちには敬虔なキリスト教徒もいたことから、高踏派の作品に見られる宗教意識の多層性を検討する必要性を確信した。

また、高踏派とランボーでは教育を受けた時代は異なるものの、公教育におけるギリシア古典教育の比重の大きさは共通しており、時代を超えて広く流布した教材も存在する。そのため、高踏派の作品における神話的形象を分析する上で、神話に関する基礎的な知識の源泉のひとつとして、研究代表者が収集したランボーに関する教育資料を大いに活用できると考えた。

２．研究の目的

本研究は、フランスの 19 世紀、特に 1850 年代から 1870 年代の、高踏派からランボーにいたる作品におけるヘレニズムとキリスト教の混淆を明らかにすることを目的とする。上記の文学作品、特に詩作品に現れる神話的形象を中心的分析対象とする。ちなみに、ギリシア神話に見られる神々（半神および超人的英雄を含む）、および聖書における代表的な登場人物（イエス、預言者）に限る。

以下の 3 つの段階を踏む。

(1) 『現代高踏派詩集』の第 1 集（1866）および第 2 集（1871）、高踏派詩人のうちルコント・ド・リール、バンヴィル、グラティニーの 1850 年代から 1870 年代に出版された詩集に現れる神話的形象の表象において、ヘレニズムとキリスト教の混在を明確化する。

(2) 従来「断絶」「訣別」という言葉で語られてきた高踏派とランボーのあいだに、宗教的混淆という点での連続性を確定する。また、既存の神話的形象をアレンジするにとどまった高踏派と、特に後期作品で独創的な超人的形象を造形するに至ったランボーとの相違を、ヘレニズムとキリスト教に関わる宗教意識の観点から明確化する。

(3) 以上の結果（(1)、(2)）を踏まえて、ヘレニズムとキリスト教という一見対立するものの混淆が、19 世紀の文学作品、特に詩においては創造性の表現として矛盾なく受容されていたことを論証し、19 世紀に特有の宗教意識のあり方の一端を明らかにする。

３．研究の方法

研究方法は、資料に基づく文献読解である。

(1)文献は以下の３つに大別される。

①高踏派およびランボーの作品：『現代高踏派詩集』（1866、1871、1876）、高踏派詩人の 1850 年代から 1870 年代に出版された詩集、ランボーの全集。

②19 世紀に広範に流通したギリシア神話およびキリスト教に関連する著作。特に上記の詩人が読んだとされる文献、および初等・中等教育において宗教、古典語・フランス語教育に使用された文献：聖書概要、公教要理、作品引用集。

③19 世紀後半に出版された①の作品に対する批評、および①の詩人たちが著した文芸批評。

神話的形象に関わる説明や描写、あるいは宗教性や神話に関連する言説を②や③から抽出し、それを踏まえて①の作品群に現れる神話的形象について綿密なテキスト分析を行う。

(2)研究代表者のこれまでの研究で収集した宗教関連の資料②における、神話的形象に関連するテキストの分類整理を行う。次いで、高踏派およびランボーの作品群①において神話的形象が現れる作品を抽出し、重点的な分析対象とするテキストをまとめる。その上で、教材に見られる神話的形象の規範的な表現に対して、高踏派の詩作品おける神話的形象の造形の独創性を明確化し、その造形における宗教的混淆の詳細を明らかにする。さらに、ギリシア神話を基とする神話的形象におけるキリスト教的要素の抽出に重点を置きながら、ランボーの作品における高踏派の影響を明らかにする。さらに、文芸批評関連の資料③を踏まえながら、1850 年代から 1870 年代の詩における「宗教的なもの」を定義し、19 世紀に特有の宗教意識を詩との関連から明らかにする。

(3)フランス国立図書館の電子化資料 Gallica を中心に資料調査をする。電子化されていない資料についてはフランスで資料

収集を行う。フランスでは国立図書館を中心的な拠点とする。

４．研究成果

(1)第二帝政下の公教育においてはギリシア語・ラテン語といった古典教育が重視され、ギリシア神話は基礎的知識であった。膨大な資料から分析対象を絞る必要があった。そのため、学校教材として認可されていたオヴィディウス『変身物語』の複数の版や神話辞典類を中心に、ヴィーナスと牧神（パン）の表象の抽出を行った。

(2)ランボーの初期の作品は高踏派の影響を受けており、彼らの作品の表現や韻の借用・模倣を経て独自性を構築していったと考えられる。ランボーの比較対象としては、バンヴィル、ルコント・ド・リールといった高踏派の巨匠と比べると、まだ十分にランボーの作品との関連が分析されていないグラティニーに注目した。グラティニーの詩篇を分析したところ、高踏派に典型的とされる様式美・造形美と、日常生活から汲み出した抒情性の混交が洞察された。グラティニーのこうした特徴が、美を追求する高踏派の詩学を吸収し、その韻律を手本としながらも独自の表現を追求していたランボーの興味を引いたものと思われる。両者のギリシア神話の神々の描写を比較分析し、神話的形象の身体描写における神秘性と卑俗性の融合をランボーの特徴であるとの結論に至った。この分析の成果の一部を学会にて口頭発表し、査読を経て学会誌でも論文にまとめて発表した。このようなランボーにおける神話的形象の描かれ方は、神的なものを人間的なものへ引き寄せ同化へ向かわせる表象と理解される。

(3)19 世紀のフランスにおいては、歴史学や文献学の発達により、ルナンの『イエス伝』に代表されるような人間としてのイエスに光が当てられた。ランボーの「福音書的散文」や『地獄の季節』に見られるイエスへの共感は、こうした 19 世紀の新たなイエス像に組み入れられるだろう。そうしたイエス像の源泉やランボーのイエス像の独自性を明らかにするための一つの切り口として、ランボーの受けた宗教教育におけるイエス像に注目した。ランボーの就学していた学校の属するアカデミー学区にある高等中学校の蔵書リストや、アンドレ・シェルヴェルの研究を参考に、当時の宗教教育に使用されていた代表的な書物におけるイエスの表象についての抽出を開始した。一冊丸ごとイエスに当てられている書物も多いので、研究代表者が博士論文において主題とした、身体に関わる部分（身体観、身体描写）に絞って着手した。19 世紀のフランスにおけるイエスの表象という大きな主題に繋がるため、今後は単に対象とするべき資料の量だけでなく、どこに重点を置いて抽出し分析対象とするかが重要な問題となってくる。イエスの表象については、研究代表者の今後の研究課題として引き継がれる。

(4)高踏派におけるイエスの表象については、当初ラプラッドの分析から着手する予定であった。しかし、ランボーとの直接的な接点（作品を読んだ形跡や引用・言及等）が少なく、ランボーとの比較研究という本研究の目的を鑑みて、早期に研究対象から外した。しかし、19 世紀のフランス詩におけるイエスの表象という点では重要な詩人の一人であると考えられることから、今後の研究対象となる予定である。

(5)ランボーの後期の作品における神話的形象は、原典や高踏派のパロディにとどまらない。神話的題材は断片的に取り入れられ、神秘性を重要な要素となっている。しかし、そうした神話的要素は（ランボーにとっての）現代的要素と組み合わされ、幻想と現実が混交する独自の世界が詩の中で展開される。こうした作品において、神話的形象はもはやそれそのものが主題ではなく、幻想物語における現実への鋭い洞察という逆説的な構成に寄与しているのである。こうした分析の成果の一部を、学会にて発表した。さらに学会誌に論文が掲載予定である。

(6)学校教材の利用は神話的形象を主たる分析対象としていたが、その過程で文体についても興味深い結果が得られた。例えば、学校教材として重用されていた子供向けのおとぎ話や寓話の文体が、ランボーの作品に取り入れられているといったことである。特定の作品の文体模倣（パスティッシュ）ではなくジャンル的特徴だが、こうした点においても学校教育の影響の重要性が再認識された。この成果は、研究代表者の新たな研究への展望に繋がっている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①塚島　真実、ランボーの変身譚―ボトムを読む―、フランス語フランス文学研究、査読有、第 110 号、2017 年、73-86 頁。

②塚島　真実、ランボーのヴィーナス、フランス語フランス文学研究、査読有、第 107 号、2016 年、109-123 頁。

〔学会発表〕（計 2 件）

①塚島　真実、ランボーにおける「変身」に

ついて、日本フランス語フランス文学会、学習院大学(東京都豊島区)、2016年5月27日。
②塚島　真実、ランボーのヴィーナス、日本フランス語フランス文学会、明治学院大学（東京都港区)、2015年5月30日。

６．研究組織
(1)研究代表者
塚島　真実（TSUKASHIMA, Mami）
東京大学・大学院総合文化研究科・教務補佐員
研究者番号：８０７６１４０２

(2)研究分担者

(3)連携研究者

(4)研究協力者